

『有坂秀世研究』のことなど

竹越 孝

私は慶谷先生の直接の学生ではない。先生の授業には東京都立大学の学部三年の時から出ていたが、中文研究室では学籍を抜くまでずっと文学専攻の学生ということになっていた。こちらから正面切って教えを乞うこともなければ、先生の方から研究テーマについて問われることもなかった。先生の学問や教育、師弟間の交流についてはそれにふさわしい人が語るであろうから、私はごく限られた範囲で思い出を綴ることにしたい。私が先生と最も密接に交流を持ったのは、『有坂秀世研究一人と学問一』の刊行に関わった2009年のことである。

きっかけは2008年の秋に『語学漫歩選』という書物を愛知県立大学・古代文字資料館の『KOTONOHA』単刊No. 3として出したことだった。これは、かつて東京都立大学の中文研究室で大学院生が中心となって刊行していた研究同人誌『語学漫歩』を選集として再刊したもので、一つの目玉として第8号（1988年）に掲載された慶谷先生の「有坂秀世『劣敗者の人生観』について」とその原文「劣敗者の人生観」を入れようと計画した。先生に転載の許可を求める手紙を書いたところ、この機会に校正をさせてくれるならば、という返事だった。早速お願いすると、こちらの想像をはるかに超える量の朱筆が入れられていて、先生の字体に対するこだわりが並大抵のものでなかったことを久々に思い出した。この時はそれほど枚数ではなかったので、台湾のフォントを混ぜたり、作字をしたりして何とか対応することができ、先生にも喜んでいただいたように思う。

古代文字資料館は愛知県立大学の吉池孝一さんが中村雅之さんとともに作った組織で、2002年創刊の『KOTONOHA』はその機関誌という位置づけになっている。都立大の院生時代に『語学漫歩』を創刊したのはこの二人だから、『KOTONOHA』は事実上『語学漫歩』の後継誌と言ってもよい。2003年に鹿児島大学から愛知県立大学に転任してきた私が、その活動に加わるのは自然ななりゆきだった。我々が『開篇単刊』に倣ってモノグラフ・シリーズを出し始めたのは2007年からだが、『語学漫歩選』が首尾よく形になったことの余勢を駆って、この機会に慶谷先生の有坂秀世関連の文章を集め、単刊No. 4として一冊にしようというアイデアが出たのだと記憶する。

慶谷先生に計画の概要を説明する最初の手紙は吉池さんが書いた。すぐに返事が来て、書名をどうするかということについてのやりとりが数回あった後（この辺は同書のあとがきに詳しい）、どうやらゴーサインが出そうだということで、具体的な作業に入る前にこちらで序文を書いて送ることになった。その担当は中村さんである。古今東西の書物に通じ、エッセイの名手でもある中村さんは、序文の類を依頼するといつも即座に達意の文章を寄せてくれるのだが、今回に限っては苦心惨憺の様子で、二稿、三稿、四稿…と書き直した原稿

を吉池さんと私に送ってきて意見を求めるというのは意外なことだった。それだけ中村さんにとってもプレッシャーのかかる仕事だったということだろう。

私の主な役割は慶谷先生との連絡係である。この本は既刊の印刷物をそのまま版下として用いるという方針だったので、一篇ずつ先生に朱を入れていただき、それに基づいて修正を加えた原稿をまた確認していただく必要がある。かくして一週間に一度か二度、定期便のように先生と私の間で手紙と校正刷が往来する日々が半年ほど続くことになった。もともと考えるよりも手を動かすのが好きな性質なので、やりとりは全く苦にならなかった。最初に記した通り、私は先生と直接の師弟関係にないので、お互いに余計な気を遣わないで済むという面もあったのかも知れない。

先生から来る手紙は常に薄い便箋を用い、おそらく先生を知る者なら誰しもが強く印象に残っているであろう、独特の謹厳実直な字体で書かれていた。宛名も一点一画まで正確に書かれているのだが、なぜか封筒に貼られた切手はいつも「ハローキティ」の絵柄で、お孫さんにもらったものだろうかと思いに思っていた。内容は、時候の挨拶の後「お元気におすごしですか。おうかがい申しあげます。」という古風な書きぶりから始まることが多く、これと良く似た表現が金田一京助編『中等国語』（三省堂、1951年初版）にも採録された有坂秀世の書簡「病床にて」に見られるのを後で知った。

事前の予想通り、総計 400 頁に及ぶ校正の作業は『語学漫歩選』の時とは比較にならぬほど大変だった。慶谷先生から送られてくる校正用原稿には毎回数多くの朱筆が入れられており、我々は週に一度吉池さんの研究室に集っては、①掲載誌や抜刷からきれいなコピーを取る、②レイアウト用紙に貼り付ける、③朱筆に基づいて切り貼りで訂正を加える、④再度コピーを取ってページを印字する、⑤修正液で汚れを消す、⑥次の校正用にコピーを取る、といった一連の作業を一篇ごとに繰り返した。最初は手探りだったが、そのうち自然に役割分担ができてきて、③は中村さん、⑤は吉池さんがメインで担当するのが一番効率的だと分かってきた。お二人は毎度職人芸的な手さばきで作業をこなし、その結果、ほとんどのページでどこが切り貼りか見分けがつかないものに仕上がっている。数年後、私は『老乞大諺解』など朝鮮時代の金属活字本に見られる「訂正」（誤字・脱字を切り貼りによって修正する現象）に興味を持つことになるのだが、見事に訂正が加えられた活字本を見るたびに、あの時の吉池研究室での作業を思い出して可笑しくなってしまう。

慶谷先生からは、次の校正に備えて「予習」に励んでいる、という怖い手紙が来たりもしたが、結局すべての原稿について初校、二校、三校と見てもらい、印刷用の版下に仕上げでいった。最終段階に近い頃になって、論文の中で引用された有坂秀世書簡にある促音の「っ」を、原文に合わせて全部大きな文字の「つ」にしなければならないことが判明して、「つつつつつ…」と大量に打って印字し、三人でそれを一つずつ切り離して貼り付けるという作業をやったこともある。

すべての編集作業を終えたのは 8 月末のことである。これで先生との定期便がなくなることに若干の寂しさを覚えつつ、編集後記に「本書のために先生とやり取りした書簡は、半

年間で 50 通を超える」と記したら、刊行後即座に先生から、「書簡の数ですが、正確には 72 通になります」という手紙が来て、やはり慶谷先生だと恐れ入った。

原稿を印刷に回し、もうすぐ出来という段になって、大学の事務局からクレームがついた。大学内の組織なのに、なぜ教員の業績ではなく赤の他人の著作物を出す必要があるのか文書で説明せよ、というもので、私は面倒なことになったと困惑するばかりだったが、吉池さんは全く動じた様子もなく、翌日、これを事務に出そうと思う、と言って一枚の紙を持って来た。見せてもらおうと、この書物を刊行することの学史的意義を理解せずに難癖をつけるとは何事か、といった調子のかなり激越な抗議文だった。その翌日には事務の担当者が飛んできて平謝りの体だったが、私はこの痛快な結末を喜ぶとともに、好々爺然とした吉池さんのどこにこんな強い意志が潜んでいるのかと不思議に思った。

その翌年、私は現在の勤め先に異動した。転勤に際してのドタバタが一段落し、ようやく単身赴任の生活に慣れ始めた頃、先生から、我々三人に直接お礼を言いたいので愛知を訪ねたい、という手紙が来て仰天してしまった。この律義さが慶谷先生の慶谷先生たるゆえんで、わざわざお出でいただくには及びません、どうかお気遣い無用に存じます、と言っても引き下がる先生ではない。結局、我々三人に私の妻を加えた四人で「対策会議」よろしくあれこれアイデアを出し合った挙句、夕食は我が家にお連れして水餃子でもてなすことになった。食事の間はとにかく沈黙が続かないよう話題を探すのに必死で、先生が中村さんとともに吉池さんの車に乗り込み、出るのを見送ったところで、夫婦で顔を見合わせてへたり込んだのを覚えている。

あれからもう七年が経った。このごろ、私が旧都立大・目黒校舎の薄暗い中文演習室で慶谷先生の授業を受けていた時代、八王子に移ってから仲間達とともに『語学漫歩』を出していた時代とは、学問のスピードが全く変わってしまったように感じることもある。ともすれば論文が大量生産・大量消費されるような時代、アメリカ式の **publish or perish** が現実味を帯びるような時代である。このたび、慶谷先生の訃報に接して、丁寧に朱が入れられた『有坂秀世研究』の校正刷と、私の元に残された手紙をもう一度読み返してみた。その一言一句をゆるがせにしない姿勢と、一点一画に気を配った字を見るたびに、結論を急ぐな、安易に妥協するな、そして何よりも **exhaustive** であれ、と先生から叱咤激励されているような気持ちになって、改めて肅然とする。